増野悦興の晩年の『日記』と日本基督教同仁教会（一）

滝澤民夫

はじめに

増野悦興（一八六五～一九一一）晩年の一九〇九～一九一一年の『日記』三冊が、ご遺族増野潤吉氏の元に遺されている。日記というよりも日々の忘備メモに近いが、病床にあった死の直前三年間余の記録は、増野悦興とユニバーサリズム日本基督教同仁教会との関わりを知る上でも貴重なので全文を翻刻したい。本稿では一九〇九年一年分の日記と、日記の末尾に記されている同年の「金銭支出簿」を紹介する。その上で、飯田町教会牧師増野と日本基督教同仁教会本部との関わりとこの時期の伝道状況について解説をする。

筆者は二〇一九年に『増野悦興研究―埋もれたキリスト者の生涯と思想―』（六花出版）［以下、『増野悦興研究』］を上梓したが、本史料紹介は増野研究に関する史料的補遺である。翻刻にあたっては、確認できる人名に［補足］を加え、事項等については月ごとに注釈を加え、解読の一助とした。

キーワード：日本基督教同仁教会、『吾徒の信条』、ブラックマーホーム、ケールン、アズバン、ロブデル、ハーサウエイ、安部磯雄

増野悦興『懐中日記』第廿二号　一九〇九（明治四二）年　四四歳

見開き頁　上部書き込み　He shall not strive nor cry.
下部書き込み　不競不喧　馬太十二ノ十九[1]

（1）「マタイによる福音書」には、「彼は争わず、叫ばず、またその声を大路で聞く者はない」とある（日本聖書協会『新約聖書』一九五四年改訳、一八頁）。これはパリサイ人の悪意に対するイエスの返答である。イエスの姿勢になぞらえて、伝道者として神の意志を広め続けたいとする当時の増野悦興の心境だったと考えられる。

一月一日　晴　亀井［茲常］[1]邸其他へ賀状出ス　終日閉居　夜真保来訪
一月二日　晴
一月三日　晴　訪近隣、アズバン［Catherine Osborne］、村井［知至］[2]、麻生［正蔵］　葛岡［静吉］植木ヨリ来状　植木へ出状
一月四日　雨　至米国大使館　訪アズバン
一月五日　晴　真保へ出状　タイムスヨリ来状
一月六日　晴　約束午前アズバン　訪アズバン、岸本［能武太］[3]　真保来訪　松村［介石］へ出状
一月七日　晴　約束夕小久保［医院］　松浦［政泰］[4]、松村ヨリ来状　小久保へ出状　訪アズバン、松浦　至区役所
一月八日　晴　村田［勤］[5]、ハーサウエイ［Agnes M. Hathaway］ヨリ来状　至目白ホーム[6]
一月九日　曇　訪アズバン　横浜ニ下リ米領事館ニ至ル　佐藤来訪　ハーサウエイヨリ来状

一月十日　雪　約束　目白日曜学校[7]　目白日曜学校（出世間的ト社会的）　至真保宅　駒込へ出状　山内ヨリ来状

一月十一日　晴　山内、米国領事館、ロブデル［Nelson Lobdel］へ出状　津和野社ヨリ来状　真保ヲ伴ヒ登記所ニ出頭ス　至牛込区役所、第百銀行

一月十二日　晴　訪アズバン、鳥越寓　駒込（三）[8]、高木壬太郎へ出状　蘆川来訪

一月十三日　雪　岡田恒輔来訪　高木、鳥越、アズバーンヨリ来状

一月十四日　曇　津和野社（、五）[9]、鈴木繁次、三好愛吉へ出状　小久保ヨリ来状

一月十五日　晴　至広告社、仁寿生命　訪堀江［義子］[10]　星野来訪　富田ヨリ来状　警保局、郵便局へ休刊届出ス[11]

一月十六日　晴　約束　万年町学校　ロブデルヨリ来状　ロブデルへ出状（報告）　至第百銀行　訪ハーサウエイ

一月十七日　晴　高田へ出状　訪宮内［黙蔵］　岡田恒輔[12]ヨリ来状

一月十八日　雪　岡田、松村へ出状　訪畑［歓三］[13]

一月十九日　雨　駒込（六）へ出状　アズバーン、松村ヨリ来状　岡田恒輔来訪

一月二十日　雨　約束　アズバーン　訪アズバーン　岡田正男来訪　高田、丁酉幹事、村井ヨリ来状　村井へ出状

一月二十一日　雨　訪アズバーン　松浦ヨリ来状　松浦、長野へ出状　小久保来訪

一月二十二日　雨　麻生［正蔵］、高木ヨリ来状　高木へ出状　丁酉幹事へ出状

一月二十三日　晴　長野、北沢［定吉］ヨリ来状　長野、北沢へ出状
一月二十四日　晴　約束　丁酉会[14]　訪アズバン　東京堂、鈴木宅、松村　丁酉会ニ出席ス
一月二十五日　雨　三好愛吉ヨリ来状　三好、山内、宮田［修］、村井、ロブデルへ出状　坂上来訪
一月二十六日　晴　鈴木（足利人）来訪、長野ヨリ来状
一月二十七日　晴　訪アズバン　鳥越（五〇）、青木［要吉］（五）[15]、佐治［実然］（二、五）[16]、木山へ出状　村田ヨリ来状　正路喜社へ出状
一月二十八日　曇　訪区役所　地主、山内　同窓会幹事ヨリ来状　村井へ出状
一月二十九日　晴　断髪　佐治、桜井、村井ヨリ来状　桜井、駒込（六）、麻生、同窓会幹事へ出状
一月三十日　晴　約束　宮田　鳥越、宮田ヨリ来状
一月三十一日　晴　約束　村井　亀井家ヨリ来状　訪宮田、村井、堀江

（1）亀井玆常は旧津和野藩亀井家一四代当主。祖父玆監に増野悦興の父貞吉が仕えた。貞吉は戊辰戦争に際し、藩主玆監より錦旗守衛隊軍事参謀兼監察を命じられ、東征軍に参加し江戸に入った。後に増野は亀井家の主宰する奨学会の理事を務めた。
（2）アンドーバー神学校のバートレットホールで共に起居した村井知至はこの年六月、増野の窮状に際して、入院費用援助呼びかけの発起人となった。その経緯は『増野悦興研究』第九章第二節に記した。
（3）同じく発起人の岸本能武太は増野の死後、『丁酉倫理会 倫理講演集』第一一一輯（一九一一年一一月）で追悼特集を編んだ。
（4）同じく発起人の松浦政泰は大阪基督教徒青年会の同志で、『福音叢誌』への翻訳文掲載を増野に勧めた。増野支援の発起人となった。
（5）村田勤は『福音叢誌』編集人。増野の勧めでユニバーサリスト教会員にもなった。

（6）目白にあったユニバーサリスト教会（この年八月二六日、増野の命名で、日本同仁基督教会と名称変更許可）の婦女子救済施設ブラックマーホーム（The Blackmer Home for girls）。増野はここで定期的に聖書講義をしていた。

（7）増野は校長として説教をしていた。

（8）「駒込（三）」の数字は借金の返済額三円で、「駒込」は高利貸と考えられる。一月五日の「タイムス」、二七日の「鳥越」、二八日の「山内」も同様であろう。安部磯雄はこの年の八月二一日付の増野への手紙で、借金の相手を「アイス」と書いている（『増野悦興研究』五〇〇～五〇一頁）。アイスは氷菓子＝高利貸のことである。「金銭支出簿」によれば、この年の「駒込」への返済は一五二円に上っており、月平均一二円六六銭を定期的に返済している。埼玉県川越中学校長を退職後、定職を持たなかった増野は、多くの知人・友人や高利貸からの借金で生計を立てていた。この年、見るに見かねた安部と岸本能武太により、増野の「財政整理」が実行されることになる。安部と岸本は多額の金子を増野に用立てていた。その詳細は『増野悦興研究』第九章第二節に記した。

（9）「津和野社（、五）」の数字は年会費五〇銭と思われる。

（10）堀江義子は増野の妻咲子の母もとの妹。伊藤博文・下田歌子とともにフランスに留学し、帰国後宮内省で明治天皇の皇女御用掛。増野を埼玉県第三中学校長に斡旋したとも推測される。姪咲子夫妻の後ろ盾であった。

（11）主宰していた「宗教道徳的修養の機関」成民会の機関誌『成民』は、健康上の理由から二月号（通巻第一七号）で休刊した。成民会と『成民』については『増野悦興研究』第八章第二節に記した。

（12）岡田恒輔は埼玉県第三中学校（川越中学校）第一回卒業生で、川越中学校第七代校長。増野の一〇回忌に遺稿集『筆華舌英』を自費刊行し、「増野悦興先生伝」を寄せた。

（13）畑歓三は妻咲子の弟。米国で宗教哲学を学び、帰国後関西学院で教えた。終生、増野一家を精神面・経済面から支えた。

（14）丁酉会は丁酉倫理会のことで、増野は会員として、毎月の例会に参加し、少なからぬ文章を『丁酉倫理会倫理講演集』に寄稿している。その内容については『増野悦興研究』第八章第三節に記した。

（15）坂斎（青木）要吉は一八八六年三月、増野ほか九名の仲間と同志社英学校を連袂退学した仲間で、増野支援の発起人となった。

（16）佐治実然（日本ゆにてりあん弘道会長）は、増野の依頼で『成民』に寄稿し、その窮状に対しては原稿依頼や金銭面での融通をしていた。

二月一日　晴

二月二日　曇　約束　都屋　訪都屋、坂上、岸本　アズバンヨリ来状　アズバン、村井（書留）、岸本、東京堂、警醒社、高島［平三郎］へ出状

二月三日　雨　訪小久保　麻生、安部［磯雄］(1)ヨリ来状　麻生、安部（六）へ出状

二月四日　曇

二月五日　晴　訪小久保　安部ヨリ来状

二月六日　晴　訪亀井邸　39(2)、

二月七日　晴　訪中村興麿(3)　高島ヨリ原稿来ル　高島、植木へ出状　37,9

二月八日　晴　中村静子氏葬式ニ会ス　午后ホームニ至リ夜半帰ル（登一郎開(ママ)雇ノ件）　孔子教会(4)ヨリ来状

二月九日　晴　至ホーム　中村興麿、丁酉幹事ヨリ来状　駒込へ出状（三、五）

二月十日　晴　至第百銀行　ロブデル、宮内ヨリ来状

二月十一日　晴　午后小雨　憲法発布二十年祭　至孔子教会総会

二月十二日　晴　ロブデルへ出状　坂本直三郎ヨリ来状

二月十三日　晴　丁酉幹事へ出状　タイムス、植木、中里リアヨリ来状
二月十四日　晴　至ホーム、丁酉会
二月十五日　晴　植木、村井、中里、松村へ出状
二月十六日　晴　至東京堂、中庸堂、真保宅、仁寿生命　大工、地主へ出状
二月十七日　晴　ロブデル、真保へ出状　訪大熊　佐藤来訪
二月十八日　晴　訪佐治　高木、三輪田［元道］、堀江へ出状　村井ヨリ来状
二月十九日　雨　佐治、村井ヨリ来状　村井、宮内へ出状　大工来訪
二月二十日　晴　訪村井　頼憲、平野［周三］、真保ヨリ来状　駒込（六）、平野、川田へ出状
二月二十一日　晴　訪宮田　杉山［重蔵］へ出状
二月二十二日　晴　訪畑　岡田恒輔来訪　ロブデルへ出状
二月二十三日　晴　北沢ヨリ来状　北沢、中島徳［蔵］（原稿）(5)［］大熊へ出状
二月二十四日　曇　鈴木十郎、植木ヨリ来状　植木、山内へ出状　安部ヨリ原稿来ル　訪堀江、佐藤宅
二月二十五日　晴　訪鈴木宅
二月二十六日　晴　至第百銀行　赤司［繁太郎］(6)来訪　ロブデル、宮内、高木、江守ヨリ来状　高木へ出状
二月二十七日　晴　駒込（五、五）、鈴木（二）へ出状　訪地主、山内
二月二十八日　雨　約束　目白日曜学校　目白日曜学校ニ至ル　鈴木、三輪田（原稿）ヨリ来状

（1）安部磯雄は日本基督教同仁教会飯田町教会での増野の葬儀で司式を行い、その後、岡田恒輔編の遺稿集『筆華舌英』に「増野悦興君を憶ふ」を寄せた。

（2）肺病を患っていた増野は、時として体温を書きつけている。
（3）中村興麿は増野を霊南坂教会牧師に招聘した竹越与三郎の実弟で、陸軍軍人。
（4）終生キリスト教徒を自任していた一方で、孔子教会員となって儒教に回帰した増野は、「孔子教会員としての予が立場」（『成民』通巻第一四号、一九〇八年一一月一五日）を発表している。その論理の詳細は『増野悦興研究』第八章第二節に記した。
（5）中島徳蔵は『丁酉倫理会　倫理講演集』第一一一輯（一九一一年一一月）の増野追悼特集に「雷軒増野悦興君小伝」を寄せた。
（6）赤司繁太郎は東京ユニバーサリスト中央会堂の牧師で、成美高等英語女学校長。

三月一日　晴　訪青木、岸本　三輪田、高島、波多野［培根］(1)へ出状
三月二日　雨　訪アズバン　中島喜一郎ヨリ来状　中島、ロブデル、宮田へ出状
三月三日　晴　村井ヲ外国語学校ニ訪フ　竹中繁来訪　宮田ヨリ来状　波多野へ出状
三月四日　晴　波多野ヨリ来電　波多野、大工、青木へ出状
三月五日　雨　至安田銀行　亀井家ヨリ来状　東京堂、松村、隈本、友枝へ出状
三月六日　曇　夜雨　断髪　アズバンへ手紙、江守、植木へ冊子出ス　野口復堂ヨリ来状　訪堀江
三月七日　晴　荒木、浅野来訪　松村、江守、小山、中庸堂へ出状　隈本ヨリ来状
三月八日　雨　小山、江守ヨリ来状　長野へ出状
三月九日　曇　訪高島　駒込（五）、ロブデルへ出状　ロブデル、佐藤々助、丁酉幹事、中庸堂ヨリ来状
三月十日　雨　山室軍平(2)ヨリ来状

三月十一日　晴　タイムス、平野、友枝、長野ヨリ来状　訪アズバン、安部
三月十二日　曇　夜雨　中島徳、丁酉幹事、北沢、山室、長野、川田、佐藤々助　岸本、アズバンへ出状
ハーサウエイ、長野、平野ヨリ来状　至目白ホーム
三月十三日　晴　夜地震　沖津来訪　中島ヨリ原稿返送ス
三月十四日　晴　訪岸本　安部、松村へ出状　植木、坂本直三郎ヨリ来状
三月十五日　晴　北沢ヨリ来状
三月十六日　曇　訪佐藤宅、ハーサウエイ　アズバン、佐藤々助ヨリ来状　アズバンへ出状
三月十七日　雪　ロブデル、蘆川ヨリ来状　ロブデル、蘆川、中島徳、岸本へ出状
三月十八日　晴　至第百銀行　中島、岸本ヨリ来状
三月十九日　晴　駒込（二、五）、岡田恒へ出状　同志社、小山正武ヨリ来状
三月二十日　曇　夜雨　小山、坂木直、植木へ出状　至真保宅、中庸堂、東京堂　佐藤潔ヨリ来状
三月二十一日　晴　至飯田町教会　三浦、日生野来訪　江守ヨリ来状
三月二十二日　晴　江守へ出状
三月二十三日　雨　村井、北沢、ハーサウエイヨリ来状　北沢へ出状　訪村井
三月二十四日　晴　訪岸本宅、安部　岸本、江守、杉山（車代）へ出状　午后七時半新橋発(3)
三月二十五日　曇　午前九時京都着　ロブデル、大熊へ出状　午后波多野ニ至ル
三月二十六日　雪
三月二十七日　晴　約束　日本教会教談会　訪礒江

三月二十八日　曇　約束　目白日曜学校　午后京都発下神辻孝次郎を訪フ　夜辻方ヲ辞シ宝塚ニ至リ分銅屋ニ投宿ス　ロブデルヨリ来状

三月二十九日　雨　午前七時宝塚発午后京都ニ帰ル　本田、駒込、辻、第百銀行へ出状

三月三十日　晴　辻ヨリ来状　辻、宮田（二）、大熊、岡田へ出状　礒江叔父来訪

三月三十一日　晴　礒江ヨリ夕食ニ招カル

（1）波多野培根（同志社普通学校教頭、のち西南学院教授）は増野の従弟。晩年に心を許した人物の一人でもあり、京都では増野は波多野宅に宿泊した。

（2）山室軍平・救世軍と増野・日本基督教同仁教会との関係は現時点では確認できていない。

（3）三月二四日から四月三日までの一一日間にわたるユニバーサリスト教会の、京都～静岡への伝道活動の記録は残されていない。「金銭支出簿」の雑録に旅費・宿泊費などの記載がある。この間、肺病への罹患を避けるために妻咲子と幼少の長男肇が寄寓していた京都の西尾幸太郎（咲子の妹テルの夫）牧師宅を訪れたかどうかも書かれていない。

四月一日　晴　辻、第百銀行ヨリ来状　午後三時ノ汽車ニテ京都発八時名古屋ニ着清野ニ投宿ス　長野、佐藤へ出状　断髪

四月二日　晴　晴　午前訪長野　午后二時名古屋発夜九時半静岡ニ着ス

四月三日　雨　訪ロブデル宅[1]　午後二時静岡発八時過新橋着九時帰宅ス

四月四日　雨　訪岸本、安部、アズバン、大熊、坂上、山内、波多野、礒江、長野、平野、安部へ出状　訪山内

四月五日　雨　訪保険会社、坂上、勝田　駒込（二、五）、大熊、安部、植木、中島徳へ出状　山内、大熊ヨリ来状

四月六日　雨　訪佐治、目白ホーム　村井ヨリ来状　村井へ出状

四月七日　晴　風　訪堀江、仁寿生命　福田フメ来訪　村井ヨリ来状　津和野社幹事、村井へ出状

四月八日　晴　釈迦降誕日　訪岸本、勝浦宅、村井、野口宅　今井、大熊へ出状　大熊、頼憲来訪

四月九日　晴　堀江、木山、タイムスへ出状　野口、長野ヨリ来状　至牛込役所　山本四男来訪

四月十日　晴　訪ハーサウエイ、アズバン　木山、江守ヨリ来状

四月十一日　晴　約束　目白曜学校　至ホーム　長野、岡田、勝田来訪　植木、岸本、北沢、中島徳へ出状　杉浦、中島、平野ヨリ来状

四月十二日　晴　約束　午前九時女子師範学校　福田フメ保証人トシテ女子高師始業式ニ列ス　ケイルン［G. Keirn］博士来着之ヲホームニ迎フ　訪岸本　佐藤々助、安部、大熊ヨリ来状

四月十三日　晴　至四谷税務署　秋田教会(2)ヨリ電信、福田フメヨリはがき来ル　ハーサウエイ、安部、福田、波多野、杉浦［忠雄］(3)（、五）へ出状

四月十四日　晴　約束　午後一時会議　目白ホームニ教役者会アリ　福田、安部ヨリ来状　福田、松村、佐藤々助、東京郵便局、警保局へ出状　伊藤来訪　不在中家翁、三浦、岡田恒来訪

四月十五日　雨　訪安部　安部、［増野］自助(4)、辻へ出状　ケールン氏歓迎茶話会ノ為メ佐藤宅ニ招カレ至ル

四月十六日　晴　アズバンへ出状　佐藤々助来訪

四月十七日　晴　約束 午后三時ホーム 吊礼ノ為メ杉浦ヲ訪ヒ其レヨリホームニケールン氏接迎会ニ列ス
宮田、杉浦忠雄、植木、孔子教会ヨリ来状　高島、浦口へ出状

四月十八日　晴　夜雨　約束 午前飯田町教会　目白日曜学校ヲ了へ飯田町教会ニ至ル　ケールン氏紹介式アリ　亀井家、家族会幹事ヨリ来状　アズバンへ出状　鈴木醇来訪　夜飯田町教会ニ至ル　自助ヨリ来状

四月十九日　曇　夜雨　至第百銀行、小久保医院、三省堂、地主宅　ケールン、ロブデル、岡田恒来訪
亀井役所、家族会へ出状　ハーサウエイヨリ来状　植木へ出状

四月二十日　晴　約束 午后六時半庄司愛レリプ(ママ)ションイ婚姻祝賀会ニ招カレホームニ至ル　四谷税務署（所得届）、隈本へ出状　夕ニ庄司ア

四月二十一日　晴　蘆川ヨリ原稿、歓三ヨリ手紙カ来ル　蘆川へ出状　訪堀江、山内　勝浦ノ赴任ヲ新橋ニ送ル

四月二十二日　晴　訪鈴木、大熊

四月二十三日　雨　約束 午后七時孔子教会　午后二時亀井邸　ケールン、ロブデル来訪　亀井家園遊会ニ至ル　福田フメヨリ来状　福田、アズバーンへ出状

四月二十四日　晴　訪安部、岸本　蘆川ヨリ来状　蘆川、安部、高島、青木へ出状　長野へ出状　家翁来訪

四月二十五日　晴　午前及午后飯田町教会ニ至ル（完全ナル人格）　大熊来訪　訪岸本、宮田　看護婦会、隈本、坂本直三郎ヨリ来状　看護婦会、安部へ出状

四月二十六日　晴　約束 午後一時香霊堂　植木ヨリ来状　植木、平野、高木壬、中庸堂、アズバーンへ出

状　訪杉山宅、東洋恕会学校、午后杏貫堂看護婦会ノ為ニ演説ス　女子教育ニ伴フ疑問
ケールン、ロブデル来訪

四月二十七日　晴　杉山、高木、アズバンヨリ来状　アズバン、駒込（五）、佐治（二、五）へ出状　岡田正へ出状　訪佐藤宅　長野へアズバンノ手紙回送

四月二十八日　晴　アズバン、丁酉会、タイムス、佐治ヨリ来状　丁酉会、長野へ出状　訪深井

四月二十九日　晴　夕雨　訪松村　飯田町ニ至リ長野ト会ス　安部へ出状　安部ヨリ来状

四月三十日　雨　約束　午后五時丁酉会　平野、安部ヨリ来状　アズバンへ出状　至中庸堂、東京堂　丁酉晩餐ニ出席ス

（1）この時期、ロブデルは静岡教会牧師として赴任していたと考えられる。
（2）増野は、秋田教会への伝道活動を、帰国途上で他界したケート（I. Wallace Cate）牧師の遺志を継ぐものとの使命感で、病躯を顧みず続けていた。
（3）杉浦忠雄は増野の妻咲子の末弟。のちに大審院判事。
（4）増野自助は増野の異母弟。父親増野貞吉と同居していたが、扶養費をめぐって晩年の増野と金銭的な軋轢があった。

五月一日　晴　約束　都屋　断髪　至都屋　村井、松村ヨリ来状　安部、真保、中島徳、購読者へ出状(1)
訪村井　安部間、ケールン来訪

五月二日　晴　目白ニアズバンヲ訪フ　岡田正男来訪　真保ヨリ来状　アズバン、植木へ出状　飯田町ケールン説教　煩悶ノ排除

五月三日　晴　訪アズバーン、葛岡　自助ヨリ来状　自助、岡田正男へ出状
五月四日　曇　夕雨　約束　午后一時リード　村井、自助ヨリ来状　長野へ手紙、タイムスへ金送ル
　至仁寿生命、リード方　岡田正男来訪
五月五日　晴　夕雨　訪宮内　北沢、浦セヨリ来状
五月六日　雨　訪安部　安部へ出状　長野、安部間ヨリ手紙亀井家ヨリ書籍来ル
五月七日　曇　夕雨　ロブデル、安部ヨリ来状　安部、植木へ出状　訪堀江　ケールン来訪
五月八日　曇　約束　午前八時半リード　訪リード、亀井邸　駒込（三、五）、長野へ出状　植木ヨリ来状
五月九日　晴　約束　目白日曜学校　目白日曜学校ニ至ル　午前及ビ夕飯田町教会ニ出席ス（相互ノ益）
　ロブデル、松村へ出状
五月十日　晴　至区役所　松村ヨリ来状
五月十一日　曇　植木、タイムスヨリ来状　訪リード、告森寓、三並［良］、ケールン　植木、三並へ出状
五月十二日　雨　真保ヨリ来状
五月十三日　雨　訪告森　ロブデル、村井、堀江ヨリ来状　ロブデル、安部、東京郵便局へ出状　岸本ヨリ来状
五月十四日　雨　訪小野宅、岸本宅　ロブデル、杉山、植木へ出状
五月十五日　晴　至目白ホーム　女子教育家恕話会幹事ヨリ来状

五月十六日　雨　杉山、ロブデルヨリ来状　恕話会幹事、安部、三並へ出状　夕ケイルン説教題　高き態度

五月十七日　晴　自助、三並ヨリ来状　リードへ出状　至第百銀行、麹町区役所、地主方、佐藤宅

五月十八日　晴　大掃除　木山、植木、安部、中島喜、孔子会ヨリ来状　木山へ出状　安部へ出状

五月十九日　晴　訪大熊宅　ケールント永田町ニ至ル　大熊来訪　ロブデル、木山、中島喜、平野へ出状

五月二十日　雨　訪アズバン寓　孔子教会公開講演ヲ聴ク　江守ヨリ来状　江守、駒込（ニ、五）へ出状

五月二十一日　晴　リードヨリ来状　孔子会研究会ニ列ス

五月二十二日　晴　訪アズバン、山本地主、ケールン　佐藤々助ヨリ来状

五月二十三日　晴　目白日曜学校出講　午后丁酉倫理会ニテ演説ス　伝道ト教育及政治　大学御殿ニテ丁酉会哲学会共同ノ晩餐アリ列席ス

五月二十四日　晴　安部ヨリ来状　安部、杉山へ出状　訪宮田、山内

五月二十五日　晴　約束　リード、高島　訪安部、リード、高島　植木、平野、中島喜ヨリ来状　杉山ヨリ来状　不在中鈴木（足利）来訪

五月二十六日　雨　訪坂上宅、佐藤潔　安部、竹越［与三郎］(2)、佐治へ出状

五月二十七日　晴　断髪　目白ホームニ至リ村井ト共ニ昼食ヲ呼バル　駒込へ出状（六）　中島力造送別会幹事ヨリ来状　右へ出状

五月二十八日　晴　訪ケールン、戸川［安宅］(3)　宅、牛込区役所　自助、佐治ヨリ来状　自助へ出状

五月二十九日　晴　戸川ヨリ来状　ロブデルへ出状　訪リード、綱島　ケールント共ニ惟一館ニ至ル　大熊

外一名来訪

五月三十日　晴　約束 午后五時飯田町　川越中学校[4]ヨリ画葉書来ル　鈴木繁蔵来訪

五月三十一日　晴　至目白ホーム、中庸堂　牛込郵便局ヨリ来状　凡テノコトハ働キテ我等ノ為メニ益ヲナスナリ

（1）購読者は『成民』の購読者だと思われる。

（2）竹越与三郎は増野の訃報に接して、「読画楼閒話」（『日本』一九一一年一〇月二四日）で慨嘆した。

（3）戸川安宅は『成民』第三巻第二号（通巻一三号、一九〇九年二月一五日）に、「孔子教会に就きて」を寄稿している。

（4）川越中学校は初代校長増野が、新島襄の遺志の体現を目指した地方の公立中学校だった。増野を慕った岡田恒輔らの第一回生は晩年の生きがいでもあった。

六月一日　晴　約束 午后六時半児童研究会　ケールン静岡へ出発ス　長野、真保へ出状　児童研究会ニテ演説ス　余ノ信仰的実験一班[1]

六月二日　晴

六月三日　晴　訪松村　杉山へ出状

六月四日　晴　杉山ヨリ来状　駒込（三、五）、安部、杉山へ出状

六月五日　晴　夜雨　訪堀江　リード[2]ヨリ来状　リードへ出状

六月六日　雨　安部ヨリ来状　飯田町教会説教　将来ノ宗教改革　村田勤　訪戸川宅

六月七日　雨　約束 午后一時リード　岡田恒輔、戸川ヨリ来状　岡田へ出状　訪リード（終結）

六月八日　晴　上野ニ行キ表慶館ヲ観ル　不在中中島喜一郎来訪
六月九日　雨
六月十日　晴　江守ヨリ来状
六月十一日　曇　入梅　タイムス、長野、ロブデルヨリ来状　ロブデルへ小包葉書、戸川へ葉書出ス　至目白、飯田町
六月十二日　晴　午后教談大会ニ至ル　岡田恒輔、戸川ヨリ来状
六月十三日　晴　約束　目白日曜学校　至ホーム　駒込ヨリ来状　駒込へ出状　中島喜、真保来訪
六月十四日　曇　中島徳蔵ヨリ来状　中島へ出状
六月十五日　晴　玉川ニ散歩ス　安部へ手紙、中島へ原稿及葉書出ス　孔子教会ヨリ来状
六月十六日　曇　ロブデルヨリ来状　ロブデル、岡田恒輔へ出状
六月十七日　曇　訪河合寓、中島喜　岡田恒輔来訪
六月十八日　晴　約束　孔子教会　駒込（四、五）へ手紙、植木、新誌出ス　孔子教会輪講ニ列ス　坂本立之介ヨリ来状　訪大熊
六月十九日　雨　福田フメヨリ来状　福田へ出状
六月二十日　晴　飯田町説教　家庭ノ神　戸川　訪麻生、晩香寮　安部ヨリ来状　安部、アズバン、岡田恒輔、松村へ出状
六月二十一日　雨　河合、安部、岡田恒輔、哲学会、丁酉会ヨリ来状
六月二十二日　晴　訪中島喜寓　中島喜、中島徳、アズバンヨリ来状　中島へ原稿、葉書出ス

六月二十三日　雨　約束 安部、山内　訪安部、山内宅　松村、中島徳ヨリ来状
六月二十四日　雨　約束 アズバン、岸本　訪アズバン、岸本
六月二十五日　雨　訪宮田　進藤、山内ヨリ来状　断髪　浦口ヨリ来状
六月二十六日　雨　訪坂上　大熊ヨリ来状
六月二十七日　雨　飯田町教会　大心論　松村　丁酉研究会ニ列ス　タイムスへ出状（六、）
六月二十八日　曇　訪山本地主　佐治（二、五）、駒込（七、）、中島（原稿）、杉山へ出状
六月二十九日　雨　中庸堂、中島（原稿）、杉山、佐治ヨリ来状　中島（原稿）へ出状　至中庸堂
六月三十日　晴　訪佐藤宅

（1）増野の神学論の根幹が「信仰的実験」論である。その詳細については『増野悦興研究』第六章第二節に記した。
（2）リードについては、現時点では不詳である。

七月一日　雨　訪ケールン　大熊来訪　進藤へ原稿出ス　植木ヨリ来状
七月二日　曇
七月三日　曇　訪堀江、ケールン
七月四日　曇　村井来訪　飯田町説教　現代最大ノ要求　杉山　岡田恒、ケールン来訪　横井、松浦へ出状
七月五日　雨　村井、松浦ヨリ来状　村井、長野、岡田正へ出状
七月六日　曇　至第一銀行（ママ）　訪アズバン、松浦　岡田正来訪　アズバンへ出状

七月七日　曇　福田フメ兄妹来訪　至飯田町教会　佐藤平塚ニ移転ス　タイムスヨリ来状
七月八日　雨　長野、植木ヨリ来状　岡田正へ出状　ケールンヲ訪ヒ共ニ三番町ニ至ル
七月九日　雨　駒込へ出状（三、五）　中庸堂ヨリ来状
七月十日　曇　中庸堂へ出状　堀江キヨ、余川トヨ、松尾音次郎[1]来訪
七月十一日　晴　目白日曜学校ニ出席ス　訪松浦　ケールン、岡田正来訪　松浦、伊藤、村井へ出状　山本四男、鳥越ヨリ来状
七月十二日　晴　松浦、丁酉会、アズバンヨリ来状　丁酉会、鳥越へ出状　夜訪アズバン
七月十三日　晴　北沢、坂本、植木、中庸堂へ出状　松尾、村井、孔子教会ヨリ来状　夜訪ケールン
七月十四日　晴　断髪　若林、小久保来訪　安部ヨリ来状　安部、松尾へ出状　ケールン夫妻、アズバン軽井沢へ出発　ハーサウエイ興津へ出発
七月十五日　晴　約束　丁酉会遠足　早朝訪目白ホーム　穴守篠田館ニ丁酉会遠足ニ会シ夜帰ル　ハーサウエイヨリ来状
七月十六日　晴　九十二度[2]　訪ホーム、第百銀行、飯田町会堂、坂上　ロブデル、石川安次郎、安部、伊藤ヨリ来状　ロブデル、伊藤へ出状　岡田恒、山田準来訪
七月十七日　晴　訪安部、星野宅　日比谷公園ニ散歩ス　ハーサウエイ帰京
七月十八日　晴　飯田町教会説教　詩人ノ宗教　村井　ケールン、佐藤へ出状　中庸堂ヨリ来状　鳥越来訪
七月十九日　晴　駒込（四、五）、岡田正、星野へ出状　至内務省、東京府　岡田正来訪

七月二十日　晴　涼　訪ハーサウエイ、堀江　大熊（三、）、ケールンへ出状　佐藤、星野ヨリ来状
七月二十一日　晴　星野来訪　至上野公園、写真店　中島へ原稿、植木へ雑誌出ス　鈴木繁弘ヨリ来状　鈴木へ出状
七月二十二日　晴　約束　小久保　ケールン、星野ヨリ来状　佐藤へ出状　訪小久保
七月二十三日　晴　夜雨　稲沢、鈴木繁弘、安部ヨリ来状　鳥越、安部へ出状　至第百銀行　訪桜井　ケールン出京、午後佐藤ト其ノ旅宿ノ為メニ大奔走ス　植木へ紀念号出ス
七月二十四日　晴　不在中西尾幸［太郎］来訪　訪宮田、松村、西尾、北沢、安部間、植木ヨリ来状　安部間へ出状
七月二十五日　晴　松村、長野、伊東へ出状　飯田町説教者　ケールン　佐藤通訳
七月二十六日　晴　九十五度　約束　節制、謙抑及信仰(3)　至麹町区役所　訪宮田、坂上　佐藤来訪　ケールン退京、大熊、鈴木繁弘ヨリ来状　鈴木、植木へ出状
七月二十七日　晴　夕至飯田町
七月二十八日　晴　水平来訪　植木へ出状　西尾ヨリ来状
七月二十九日　晴　駒込（七）へ出状　ハーサウエイ、坂本直ヨリ来状　訪小久保
七月三十日　晴　小驟雨　佐治（二、五）、高田、村井貞へ出状　沖津来訪　至目白ホーム　佐治ヨリ来状
七月三十一日　晴　驟雨　［欄外］米国リーダー論文ノ件

（1）松尾音次郎は一八五年九月に増野らとともに同志社予備校の発起人となり、幹事でもあった。この時期、

増野の勧めでユニバーサリスト教会員にもなった。

(2) 華氏九十二度は摂氏三三・三度。二十六日の華氏九十五度は摂氏三五度。

(3) この時期、財政整理のために、安部磯雄との約束で、節制、謙抑を決意し、それまで以上に謹厳な信仰生活を送ろうとした。

八月一日　晴　驟雨　約束　都屋　飯田町祈祷会「アバ父云々」[1]六人　訪目白ホーム　ケールン、植木ヨリ来状　ケールン、水平へ出状

八月二日　晴　ハーサウエイヨリ来状　ロブデル、アズバンへ出状

八月三日　晴　訪目白ホーム、松浦　水平来訪

八月四日　雨　同志社校友会[2]、東京青年会ヨリ来状　訪村井

八月五日　晴　津和野社、平野ヨリ来状　安部へ出状　訪小久保

八月六日　晴　訪目白ホーム　平野、津和野社、同志社校友会へ出状　川上常助へ出状

八月七日　晴　夕至日比谷公園

八月八日　晴　立秋　祈祷会「父ノ如ク完全」十二人

八月九日　晴　駒込（三、五）、村上貞五郎（一、一）へ出状　夕至日比谷

八月十日　晴　岡田恒、福田フメ、安部ヨリ来状　安部へ出状

八月十一日　曇　涼　訪ハーサウエイ　福田、真保、東京府庁、村井へ出状

八月十二日　晴　楫斐来訪　沖津永眠ヲ報ズ　訪岡田、ハーサウエイ　沖津宅　ケールンへ発電　小久保へ出状　ケールンヨリ返電

八月十三日　晴　午前四時半ケールンヲ迎フベク上野ニ至ル、時刻、後レ、富士見町ニ訪問ス　沖津葬式、柩ヲ青山ニ送リ夜ニ入リ帰ル　佐藤潔ヨリ来状

八月十四日　晴　横井、水平［三治］[3]へ出状　終日ケールント庶務ヲ処理ス

八月十五日　晴　祈祷会「沖津ニ関スル所感」十二人　訪一野　岡田正、伊藤潔へ出状　アズバーンヨリ来状

八月十六日　晴　水平来訪　長野、鳩山、戸川へ出状　久保潤次郎ヨリ来状　岡田、渡辺来訪

八月十七日　晴　至第百銀行　ロブデル、西尾ヨリ来状　伊藤、ロブデル、岡田正、西尾へ出状　訪山本地主　タイムスへ送金

八月十八日　晴　中島へ原稿、大島多計比古へ手紙出ス

八月十九日　晴　伊藤、宇田愛ヨリ来状　駒込、大熊へ出状　至内務省　訪星野、小久保

八月二十日　晴　夜雨　至東京府、内務省　マグドナルドヨリ来状

八月二十一日　晴　夜雨　訪一野、家屋ヲ見分ス　安部ヨリ来状　安部、ケールンへ出状　岡田恒へ出状

八月二十二日　晴　祈祷会「幽明ノ境界ト物霊ノ其レ」十三人　佐治へ出状

八月二十三日　曇　夜雨　大熊、佐治ヨリ来状　大熊、中庸堂へ出状

八月二十四日　晴　大熊ヨリ来状　大熊へ出状　訪堀江

八月二十五日　晴　約束　午前安部　訪安部、岸本、北川、大熊　水平来訪　宮田ヨリ来状　宮田へ出状　長野ヨリ来状　断髪

八月二十六日　晴　訪目白ホーム、小久保　植木、安部ヨリ来状　安部へ出状

八月二十七日　晴　夜雨　早朝ヨリケールンヲ訪ヒ荷解ヲ手伝フ　安部ヨリ来状
八月二十八日　晴　長野ヨリ来状　訪安部、宮田、ケールン、坂上　安部（五、一）、長野へ出状
八月二十九日　晴　午后驟雨、大雷鳴　駒込、安部、平野、市原、広津、二楼教社へ出状　祈祷会「祈祷ノ必要」十六人
八月三十日　晴　訪東京府、ケールン　金井、北川へ出状
八月三十一日　晴　廿八日附ニテ教会名称変更許可ノ指令下ル[4]　訪飯田町教会、一野、ケールン、アズバン　アズバン、麹町警察署（届）、星野、水平、長野、伊藤、植木へ出状

（1）「アバ父」は「ガラテヤ人への手紙」第四章六。「このように、あなたがたは子であるのだから、神はわたしたちの心の中に「アバ、父よ」と呼ぶ御子の霊を送ってくださったのである」（『新約聖書』一九五四年改訳、二九七頁）。「アバ」は、アラム語で「父」の意。

（2）同志社英学校を五年時の卒業直前に中途退学したが、増野は校友会に入会している。死去に際し、『同志社時報』第八二号（一九一一年一一月二五日）は「増野悦興君の逝去」を報じ哀悼した。

（3）水平三治はボアソナードに学び、渡米後、八戸や大館でキリスト教の伝道に従事し、この年秋に日本基督教同仁教会の秋田教会牧師として赴任した。増野との関係調査は今後を期したい。

（4）八月二八日、日本宇宙神教教会（ユニバーサリスト教会）は、日本基督教同仁教会と名称変更した。

九月一日　晴　夜雨　岡田正男へ出状　岡田、水平来訪　今井ヨリ来状
九月二日　雨　訪飯田町教会、ケールン　佐藤来訪　小久保へ出状　目白ホームヨリ来電
九月三日　晴　夜雨　目白ニケート［Ella Gertrude Stimson］未亡人ヲ訪フ[1]　安部、アズバン、前本、水平、岡田正男へ出状

九月四日　曇　大熊、前本来訪　至飯田町会堂　川本、堀内、湯浅へ出状
九月五日　晴　教会説教　佐藤、予会名変更ノ理由ヲ説明ス[2]　夜祈祷会　「祈ノ家ト祈ノ時」　十二人
浦口ヨリ来状　長野へ出状
九月六日　晴　夜雨　約束　午后二時半飯田町　岡田正、ハーサウエイ、アズバンへ出状　至中庸堂、日比谷　午后二時半ヨリ宣教師一同ト会見シ、今后ノ働ニツキ契約ヲナス、日本同仁教会本部主事ニ任ゼラル[3]
九月七日　晴　訪ケールン、飯田町会堂　渡辺来訪
九月八日　晴　訪飯田町会堂、ケールン
九月九日　晴　ケールンヲ訪ヒ共ニ神田、第百銀行ニ至ル　駒込へ出状（三、五）　本田帰京ス　九段印刷所[4]ニ至ル
九月十日　晴　至飯田町　植木ヨリ来状　植木、福音新報、前本へ出状　水平来訪
九月十一日　曇　前本ヨリ来状　ロブデルへ出状　至飯田町、階上事務所設備成ル
九月十二日　晴　夕雨嵐　約束　飯田町説教　説教「祈祷ノ一大要素」　不在中福田兄妹来訪　祈祷会　祈祷ニ就キテノ雑感　七人
九月十三日　雨　約束　午后ケールン　訪ケールン、一野　平野ヨリ来状　平野、切抜通信社、浦口へ出状
九月十四日　晴　約束　午前内務省　午后目白　福田ヨリ来状　福田、哲学会、佐藤老人、植木へ出状　至宗教局、ホーム、晩香寮、瓦斯会社、鈴木直義方　水平、堀田相爾来訪

九月十五日　晴　目白家主ヲ訪ヒ家賃ヲ払フ　ロブデル、ハーサウエイ、孔子教会ヨリ来状　至小久保方、第百銀行　ロブデルへ出状

九月十六日　晴　安川一へ出状　亀井家ヨリ来状　訪ケールン、一野、至麹町区役所　瓦斯会社　目白ホーム　丁酉幹事ヨリ来状

九月十七日　雨　約束　区役所水道工事願　佐藤老人、水平、畳屋、事務所ニ来訪　区役所へ小使ヲ遣ス　植木直幸、岡田正男、北沢、丁酉幹事、福音新報へ出状

九月十八日　雨　約束　諸道具買入、為換、山本地主訪問　岡田正、植木定、平野、福田フメヨリ来状　小橋、植木へ出状　岡田恒来訪　訪山本地主

九月十九日　雨　約束　丁酉倫理会　駒込（三、五）、点灯会社、下谷大工へ出状　一野へ出状　小橋ヨリ来状　教会説教　佐藤　丁酉会晩餐ニ列ス

九月二十日　雨　約束　掃除　日本生命掛金払　ケールン、鳩山へ出状

九月二十一日　晴　約束　移転　彼岸ノ入　小石川区雑司ヶ谷町一一四ニ転居ス　水平来訪　牛込郵便局へ出状　北沢ヨリ来状

九月二十二日　晴　訪松浦宅、ホーム、ケールン、第百銀行　内務省へ届及納本出ス(5)　ロブデル、駒込、谷、畑、堀江、同志社校友会へ出状　ケールン師聖書講義　第一回　保羅ノ略生涯

九月二十三日　晴　至第百銀行、日本生命　大熊、前本、山本へ出状　至牛込区役所、ホーム　前本ヨリ来状

九月二十四日　雨　山本、土肥忠雄ヨリ来状　水平、牛込区役所、松村、村井、小久保、西尾へ出状　帰途

東五軒町ニ寄ル　安部、島田へ出状

九月二十五日　晴　本日ヨリ寄留ノ旨届出、植木へ出状　転居為知状数通出ス　沖津遺族来訪

九月二十六日　晴　約束 ケールン氏飯田町説教　礼拝説教ケールン　基督教的生活　祈祷会　其ノ指導者ハ神ナリ　北沢、岸田三治へ出状　平野外十人許へ冊子出ス(6)　佐治へ出状（二、五）　植木、一野、安部ヨリ来状

九月二十七日　雨　植木、一野へ出状、佐治、大熊、小久保ヨリ来状　帰途五軒町旧宅ニ立寄ル

九月二十八日　晴　一野、楫斐、坂本直ヨリ来状　佐治、一野、土肥、本田へ出状　夜ブラックマー・ホーム聖書講義ニ列ス（初回）　訪リード宅

九月二十九日　曇　夕雨　中秋　約束 自由堂へ出状、為換、小石川区役所　佐治、坂本直、ロブデル（電信）、自由堂、奨学会へ出状　佐治、奨学会、哲学会ヨリ来状　駒込、大岩、本田へ出状　訪小石川区役所、アズバン 聖書講義 第二回（ロマ十二章上(7)）

九月三十日　雨　断髪　ロブデル、佐治ヨリ来状　ロブデル、今井へ出状

（1）苦楽を共にした故ケート牧師の妻エラに、教会改名報告をしたと思われる。

（2）増野が教会員に会名変更の理由を説明したのは「宇宙神教」を「同仁教会」にした本人としての責任からである。

（3）日本同仁教会本部の外国人宣教師の伝道組織については未調査で、今後を期したい。増野の飯田町教会や秋田伝道での聖書講義、祈祷会での説教の記録の一部は残されている（『増野悦興研究』四二〇～四二六頁）。

（4）『吾徒の信条』が刷りあがった。一九〇六年に出された『吾徒の信条』を加筆して、増野悦興述『吾徒の信条』（日本同仁基督教会）が翌一〇日に刊行された（『増野悦興研究』四三三頁）。

（5）内務省への納本は『吾徒の信条』だと考えられる。
（6）冊子も『吾徒の信条』だと考えられる。
（7）「ロマ十二章上」の講義とは、「ローマ人への手紙」一二章前半一〇で、「兄弟の愛を以て互にいつくしみ、進んで互に尊敬し合いなさい」（『新約聖書』一九五四年改訳、二四九頁）とある。かつて新島襄は増野の要請に応えて、「最も深く玩味する聖書中の語句」として、「約翰伝三章十六節」と「邏馬書八章三六ヨリ三九節迄」を挙げている（『基督教青年』第五号特別附録［『復刻版 基督教青年』］）。

十月一日　晴　約束　銀行、書籍店　至第百銀行、大倉書店　青木、駒込（八、）へ出状　大岩ヨリ来状
十月二日　晴　約束　牛込区役所、午后亀井邸　安川ヨリ来状　亀井邸ニ奨学会理事会アリ列席ス
十月三日　晴　約束　午后一野、本田　植木、一野へ出状　北川ヨリ来状　礼拝説教ケールン「兄弟汝ト共ナラズバ」　祈祷会　「同仁基督教会ノ使命」[1]　午后至歯科医
十月四日　曇　約束　小石川区役所、ケールン　小石川区役所へ実践院践定樽奉賀樽ヲ届出ツ　至中庸堂、ケールン方、電灯会社、ホーム　若林、四谷税務署、平野へ出状　臨時雇佐藤帰リ、老婦よし来ル
十月五日　雨　約束　駒込へ送金　タイムス、竹中繁ヨリ来状　至教文館、電灯会社　訪松浦　夜ブラクマーホーム、聖書講義ニ列ス
十月六日　曇　約束　家主、ケールン、教会　浦口、一野、坂本直、若林ヨリ来状　島田、長野、水平、駒込（二、五）、宮内へ出状　ケールンニ午后ニ招カル　聖書講義　（羅馬十二章下）[2]
十月七日　晴　約束　東京出発[3]

～十三日　［記載なし］
十月十四日　約束 ケールン氏東京発
十月十五日　約束 ケールン氏秋田着
～十七日　［記載なし］
十月十八日　秋田発
十月十九日　帰京
十月二十日　晴　至第百銀行　麹町区役所　訪島田、ケールン　聖書講義 羅八5－25(4)　ロブデル、駒込（四、五）、斎藤、大岩、植木、小石川区役所、高島、福音新報社へ出状
十月二十一日　晴　ケールン氏名古屋へ出立　訪本多　至新橋運送屋、横浜火災保険　長野へ出状
十月二十二日　曇　松尾、伊藤ヨリ来状　松尾、丁酉幹事へ出状　訪海老名［弾正(5)］、小沢宅、一野宅
十月二十三日　晴　松尾へ出状　大杉東ヲ胃腸病院ニ訪フ　丁酉倫研究会　経済ト道徳　桑田熊蔵
十月二十四日　晴　午前礼拝説教「罪ノ培ス所ニテ恵モ愈々培セリ」　松尾ト午飯ヲ共ニス　午后訪地主山本　祈祷会　十人　農夫ノ他力依頼
十月二十五日　晴　奨学会ヨリ来状　奨学会へ出状　ケールン氏名古屋ヨリ帰ル
十月二十六日　曇　伊藤、全田、岡田正、安部（書留）へ出状　秋田教会ヨリ来状　ホーム聖書講義
十月二十七日　晴　伊東亮、哲学会ヨリ来状　海老名、小久保へ出状　聖書講義 羅八26－31(6)
十月二十八日　曇　夕雨　約束 夜小久保　丁酉幹事、伊藤ヨリ来状　哲学会、丁酉幹事、伊東、伊藤へ出状　大杉ヨリ来書　小久保聖書講義 約十五

十月二十九日　曇　小雨　電鉄車庫へ出状　安部、自助、大西［祝］[7]追悼会幹事ヨリ来状　大杉ヲ病院ニ訪フ

十月三十日　晴　電車庫、成女学校、植木ヨリ来状　駒込、佐治、ロブデルへ出状　至本所電車庫、電灯会社、ケールン方、ホーム

十月三十一日　雨　約束　大杉訪問　説教　ケールン「基督教徒タルベク如何ニスベキヤ」　午后訪大杉　祈祷会　十二人「救ハレントスルノ道ハ救ハルベク欲スルニ在リ」　佐治ヨリ来状　海老名、瓦斯会社へ出状

（1）「同仁基督教会ノ使命」を増野は、「世をして万人同胞を最大重要の旗幟」として、「神は万人の父たること」とする信仰と聖書や救主への「合理的思想」による福音を宣伝し、当代の要求に応える「活ける宗教」を説いて「神の国の証言者」となる任務を全うすること（『吾徒の信条』）、としていた（『増野悦興研究』四四二頁）。

（2）「羅馬十二章下」の講義とは、「ローマ人への手紙」一二章後半二一で、「悪に負けてはいけない。かえって、善を以て悪に勝ちなさい」（『新約聖書』一九五四年改訳、二五〇頁）とある。

（3）七日～一九日までの一三日間の秋田伝道についての記載はない。後半四日間はケールンが同道している。なお、一九〇六年夏から五回にわたる自筆の伝道記録が残されている（『四十二年秋 秋田伝道』）。説教内容などの分析は今後を期したい。

（4）「羅八5－25」の講義とは、「ローマ人への手紙」八章五から二五で、「すべて神の御霊に導かれている者は、すなわち、神の子である」、「その霊によって、わたしたちは「アバ、父よ」と呼ぶのである」とある（『新約聖書』一九五四年改訳、二四二～二四三頁）。

（5）海老名弾正と増野は、一八八九年八月の神戸教会での第四回組合基督教会総会以来の知己（『増野悦興研究』一六二～一六六頁）で、当時の二人の朝鮮認識は共通していた。

（6）「羅八26－31」の講義とは、「ローマ人への手紙」八章二六から三一で、「神がわたしたちの味方であるなら、だれがわたしたちに敵し得ようか」とある（『新約聖書』一九五四年改訳、二四三～二四四頁）。

（7）大西祝は増野が霊南坂教会牧師時代に増野の新神学紹介に対して、「教えを乞」うた（『浪花教会創立百年を迎えて』二七頁）という。大西の死去に際し、増野は「痛心至極ノ儀ニ奉存候」（一九〇〇年一一月四日付の大西絹子宛書簡）と哀悼している（『増野悦興研究』二三〇～二三一頁）。

十一月一日　晴　約束　休日開始　同志社校友会ヨリ来状　若林、福音新報へ出状　至北文館　始メテ月曜休勤ヲ実行ス(1)　海老名ヨリ来状

十一月二日　曇　約束　都屋　広文堂、児童研究会ヨリ来状　至都屋、長与病院　今朝未明大杉東永眠　夜大杉ノ遺骸ヲ教会楼上ニ移ス　訪ホーム、ケールン

十一月三日　晴　約束　成女学校　広文堂へ出状　終日教会堂ニ在リテ大杉ノ為メニ周旋ス　聖書講義　羅八32－39(2)

十一月四日　雨　伊藤公国葬　午后大杉東ノ葬式ヲ執行ス　小久保へ出状　岡田恒輔ヨリ来状　夜八時過　大杉遺族出芝帰国ス

十一月五日　雨　約束　午后四時神学会　神学会ニ列席ス　古川亀吉、宮田修、大杉伸、丸善へ出状　津和野社ヨリ来状

十一月六日　晴　約束　説教会　津和野社へ出状　安部、奨学会ヨリ来状、不在中大倉、三浦来訪　夜海老名ヲ教会ニ招キ説教ヲ乞フ　門外ヨリ観タル同仁主義ノ鼓吹

十一月七日　曇　午前説教　松尾　超腹　夕ケールン英語説教　初回　国民育成ト基督教徒　午后津和野社

秋季例会ニ出会ス　安部へ出状

十一月八日　雨　約束 大掃除　終日休息　村井へ出状

十一月九日　雨　好学会、平野ヨリ来状　家族会、駒込（二、五）へ出状　断髪

十一月十日　曇　約束 堀江　小久保へ出状　大杉ヨリ来状　祈祷会　雑感　聖書講義　哥林十五1－11[3]

十一月十一日　曇　約束 小石川区役所　ケールン　小久保、タイムスヨリ来状　至ケールン方、電灯会社、堀江

十一月十二日　晴　約束 小久保　植木へ出状　夜訪小久保（自今金曜ニ改ム）

十一月十三日　晴　安部、久保へ出状　至小石川区役所、同警察署

十一月十四日　晴　午前説教　松尾 巨人ノ出現　英語説教 自己及ビ世界ノ救施ケハ人ノ努　全田来訪　自由堂へ出状　安部ヨリ来状

十一月十五日　曇　瓦斯管設置監督ノ為メ飯田町会堂ニ至ル

十一月十六日　晴　至小久保病院、第百銀行　安部、ロブデルヨリ来状　ロブデルへ出状

十一月十七日　晴　至小久保、牛込区役所　丁酉幹事ヨリ来状　東亜会計へ出状（、五〇）

十一月十八日　晴　駒込（四、五〇）へ出状　大杉カヤ事務所ニ来訪ス

十一月十九日　晴　至小久保方

十一月二十日　晴　植木、立野ヨリ来状　訪アズバン（五、）

十一月二十一日　晴　夜来下痢、教会ヲ休ム[4]　佐藤、山崎来訪

十一月二十二日　晴　至山川医院　水平来訪　ケールンへ出状

十一月二十三日　晴　牛込区役所、タイムス、村井ヨリ来状
十一月二十四日　雨　村井へ出状　訪ケールン
十一月二十五日　曇　終日休養(5)
十一月二十六日　晴　訪アズバン、小久保　秋山老人来ル
十一月二十七日　晴　安部へ出状（書留）　平野ヨリ来状
十一月二十八日　晴　平野、村井、小久保へ出状　安部ヨリ来状　訪佐治、広文堂　午前説教　松尾
十一月二十九日　晴　夜雷雨　老婢病ノ為帰宿、平岡来ル　駒込へ出状（八）　不在中水平来訪　訪麻生宅
十一月三十日　晴　村井、中島徳ヨリ来状　中島へ出状　訪島田宅、ホーム　小久保ヨリ来状

（1）増野は肺患の進行で、教会勤務を初めて休んだ。
（2）「羅八32－39」の講義とは、新島襄が「最も深く玩味」したとする部分で、「わたしたちの主キリスト・イエスにおける神の愛から、私たちを引き離すことはできない」とある（『新約聖書』一九五四年改訳、二四四頁）。
（3）「哥林十五1－11」の講義とは、「コリント人への第一の手紙」第十五章一から一一で、「神の恵みによって、私は今日あるを得ているのである」とある（『新約聖書』一九五四年改訳、二七四頁）。
（4）下痢で教会勤務を休んだことも初めてである。
（5）一日（月）、二一日（日）、二五日（木）と三日目の休息とあり、秋田伝道の過労が見て取れる。

十二月一日　晴　小久保、岡崎へ出状　至牛込区役所、按摩宅　小久保、大熊ヨリ来状
十二月二日　晴　約束　小久保　孔子教会、植木ヨリ来状　植木へ出状　訪小久保
十二月三日　晴　約束　ケールン晩餐　長野ヨリ来状　広文堂主来訪　教役者一同ケールンニヨリ晩餐ニ

招カル

十二月四日　晴　広文堂ヲ訪ヒ「高貴ナル人格」[1]ノ出版ヲ契約ス　奨学会ヨリ来状　夕方再訪広文堂

十二月五日　晴　小久保、奨学会ヘ出状　午前説教　松尾　訪歯科医[2]

十二月六日　晴　訪歯科医　小久保ヨリ来状

十二月七日　晴　ロブデル、長野、広文堂ヘ出状

十二月八日　晴　至歯科医

十二月九日　晴　約束　小久保　丁酉会、鈴木十郎ヨリ来状　野中ヘ原稿、駒込、長野ヘ手紙出ス　夕訪小久保（講義終結）

十二月十日　晴　大熊、前本ヘ出状　断髪　中里ヨリ来状

十二月十一日　晴　中里ヘ出状　前本、自助ヨリ来状

十二月十二日　晴　約束　丁酉会　説教　松尾　午后丁酉会ニ出席　支那道徳ノ側面顔　服部

十二月十三日　晴　「高貴ノ人格（ママ）」原稿ヲ全部広文堂ニ渡ス

十二月十四日　晴　訪アズバン　高島、伊藤仙峰ヘ出状　藤原ヨリ来状

十二月十五日　晴　夜雪　約束　丁酉原稿脱了期　祈祷会感話　「同仁教会ノ将来如何」トノ問ニ対スル答ニ就キ[3]

十二月十六日　晴　藤原、自助、久保亮ヘ出状　伊藤ヨリ来状　ミツシヨン会議開カル、水平秋田教会牧師ニ任命[4]セラル

十二月十七日　晴　水平、岡田、植木、星野、小沢、奨学会、駒込（七、五）ヘ出状　奨学会、哲学会、松

村、中庸堂主ヨリ来状　至第百銀行　家翁来訪

十二月十八日　晴　藤原、岡田ヨリ来状

十二月十九日　晴　約束　ホーム昼食　午前説教　松尾「ブラックマー・ホーム」ヨリ午飯ニ招カレ至ル
松尾、岸本、松浦、村田、甲賀、同席ス　「高貴ナル人格」校正ヲ読了ス

十二月二十日　曇　久保亮へ出状　訪アズバン

十二月二十一日　晴　鈴木十郎来訪、大熊へ貸附金ノ件ニツキ精シク話シ旨ヲ了シテ帰ラシム　哲学会（退会通知）、藤原、中庸堂、広文堂へ出状　伊藤ヨリ来状　同人へ出状

十二月二十二日　晴　祈祷会　愛ハ対人的ニ限リタル道徳ニアラズ　中里ヨリ来状　亀井家ヨリ歳暮来ル

十二月二十三日　曇　岡田恒輔事務所ニ来訪　平沢ヨリ来状　水平、佐藤へ出状　斎藤へ小包送出ス

十二月二十四日　晴　水平、小久保事務所ニ来訪　植木、水平へ出状　藤原ヨリ来状　安部へ書面出ス

十二月二十五日　晴　駒込（七、五）、ロブデルへ出状　飯田町教会クリスマス午後二時ヨリ挙行セラル　亀井家ヨリ来状

十二月二十六日　晴　午前聖晩餐ヲ守リ十二名ヲ入会セシム　訪亀井邸　駒込、山岡、安部ヨリ来状　水平出立赴任ス

十二月二十七日　晴　鈴木十郎、山岡ヨリ来状　鈴木、大熊、駒込（一、）へ出状　訪宮田　至小石川区役所

十二月二十八日　曇　訪佐治　鈴木醇、藤原ヨリ来状

十二月二十九日　晴　藤原、ロブデル、谷（、五〇）、大熊へ出状　中庸堂へ出状　安川、長野ヨリ来状　祈祷会「時ヲ知レ」

十二月三十日　晴　大熊、若林、福音新報へ出状

十二月三十一日　晴　津和野人新年会幹事ヨリ来状　同上へ出状　亀井家ヨリ来状

（1）『高貴なる人格』は一九一〇年一月一八日に広文堂書店より刊行された。「自序」で増野は、現今我国精神界の最大要務は「信念の復興」であり、「高貴なる人格」とは「信仰の人」にほかならないとした。内容の詳細は『増野悦興研究』第九章第一節に記した。

（2）三日間歯科医に通っており、これも珍しいことである。

（3）信徒から同仁教会の将来について問われた増野が、祈祷会で今後の展望を語った。同様の問いかけは地方でも出されており、秋田教会では「同仁と改名の主旨」を説明しているが、その中で「同仁基督教会ノ使命」にも触れ、「「天は自ら助くる者を助く」てふ原理に則り「正義は最後の勝利者たり」との信念を鼓吹し、以て該教義の真相を世に明かにせんことを勉め」」（『吾徒の信条』）ることが将来につながると語ったと考えられる。

（4）水平三治が赴任した秋田教会はケート牧師によって開拓された。増野は秋田教会の信者と自治的運営は「最モ理想ニ近キモノ」」（『四十二年秋 秋田伝道』）としていた（『増野悦興研究』四二六頁）。

金銭支出簿

月日	適用	円銭厘
1. 3.	岸本へ祝品	1.000
9.	横浜行	1.400
12.	駒込へ	3.000
14.	津和野社	.500
15.	仁寿生命	.870
	加留多	.350
	堀江へ	2.100
16.	タイムス	6.000
18.	畑へ	15.000
19.	駒込へ	6.000
23.	福音新報	.700
24.	鈴木へ	12.000
	丁酉会	1.000
27.	鳥越へ	50.000
	青木へ	5.000
	佐治へ	2.500
28.	租税	6.110
	山内へ	12.000
29.	駒込へ	6.000
30.	夕食	1.100
31.	本田へ	6.000
	新聞	.950
	一色屋	2.800
	安部 十、十一、十二	6.000
	［計	148.380］
2. 2.	都屋	5.700
6.	寒暖器	.450
9.	駒込へ	3.500
14.	丁酉会	1.000
16.	仁寿生命	.870
18.	佐治へ	2.500
20.	駒込へ	6.000
	昼食	.440
21.	畑へ	15.000
24.	堀江へ	2.100
25.	鈴木へ	12.000
27.	駒込へ	5.500
	新聞	.950
	山内へ	12.000
28.	一色屋	3.500
	本田へ	6.000
	青木へ	5.000
	［計	82.510］
3. 2.	宮田へ	2.000
	シヤツ	.750
	行李	1.200
3.	仁寿生命	.870
4.	日本生命	2.800
9.	駒込へ	5.000
	夕食	.500
19.	駒込へ	2.500
30.	宮田へ	2.000
31.	本田へ	6.000
	新聞	.950
	［計	24.570］
4. 3.	旅行費	23.000
4.	山内へ	12.000
5.	駒込前月残	2.500
	仁寿生命	.870
	坂上へ	20.000
6.	佐治へ	.800
9.	租税	.710
13.	〃	5.450
19.	辞書	1.200
20.	秋田教会 十二－三	1.000
21.	山内へ	12.600

	22.	鈴木へ	12.000
	26.	坂上へ	20.000
	27.	駒込へ	5.000
		佐治へ	2.500
	30.	新聞	.950
		一色屋	3.330
		丁酉会	1.000
		本田へ	6.000
		［計	130.910］
5.	6.	福音新報	.700
	4.	タイムス	6.000
	8.	駒込へ	3.500
	19.	大熊へ	4.000
	20.	駒込へ	2.500
	21.	孔子教会費	1.000
	23.	丁酉晩餐	1.500
	25.	帽子	1.200
	27.	駒込へ	6.000
	30.	本田へ	6.000
		一色屋	.900
		新聞	.950
		佐治へ	2.500
		［計	36.750］
6.	4.	駒込へ	3.500
	16.	夏羽織	5.200
	18.	駒込へ	4.500
		大熊へ	2.000
	21.	日本生命	2.800
	27.	タイムス	6.000
		佐治へ	2.500
		丁酉会	1.000
	28.	靴	3.100
		駒込へ	7.000
	29.	新聞	.950
	29.	本田	6.000
	30.	一色屋	1.700
		［計	46.250］
7.	9.	駒込へ	3.500
	11.	医師払	2.880
	12.	中元用	1.350
	13.	新聞	.950
	15.	丁酉遠足	1.300
	16.	本田へ	6.000
	19.	駒込へ	4.500
	20.	大熊へ	3.000
	21.	写真	3.500
	29.	駒込へ	7.000
	30.	佐治へ	2.500
		一色屋	2.100
		［計	38.580］
8.	1.	都屋	4.500
	8.	駒込へ	3.500
	17.	タイムス	6.000
		福音新報	.700
	19.	駒込へ	4.500
		紀念額	.500
	22.	佐治へ	2.500
	28.	安部へ	5.100
	29.	駒込へ	7.000
		本田へ	6.000
		一色屋	1.350
	30.	新聞	.950
		［計	42.600］
9.	9.	駒込へ	3.500
	10.	冬物洗濯	5.000
	15.	家賃	4.800
	17.	電車切符	.850

18.	一色屋拂	.450
18.	日本生命	2.800
18.	駒込へ	3.500
19.	丁酉会	1.000
20.	本田へ	6.000
22.	布団	1.850
	辞書	1.150
23.	租税	6.300
24.	冬帽子	2.800
	電車切符	.850
25.	佐治へ	2.500
	雨靴	2.000
27.	タイムス	6.000
29.	家賃	8.500
30.	新聞	.950
	三河屋	1.320
	米屋	1.000
	大工	2.040
	東京教会	.250
	［計	65.410］
10. 1.	駒込前月分	8.000
3.	一野へ	.600
	歯科医	.700
4.	臨時雇夫	2.000
	中庸堂	.335
5.	駒込へ	2.500
	バイブル	.500
	下婢へ	.500
20.	駒込へ	4.500
21.	洗濯盥	.420
	点灯料	.360
	電車切符	.850
23.	丁酉会	1.000
	大杉へ聖書	.400
27.	家賃	8.500
28.	下婢へ	2.000
	電車切符	.850
	東京教会	.250
30.	駒込へ	8.000
	佐治へ	2.500
	事務所払	.480
31.	新聞	.500
	米屋	2.000
	車屋	.450
	三河屋	2.490
	［計	50.685］
11. 2.	都屋	4.500
9.	駒込へ	2.500
11.	電車切符	.850
13.	点灯料	.360
16.	洋食屋	1.570
	タイムス	6.000
	東亜協会	.500
	置時計	1.000
17.	印刷費	1.000
18.	駒込へ	4.500
	地文館	.720
20.	電車切符	.850
	口覆	.250
25.	家賃	8.500
	下婢へ	2.500
	東京教会	.250
28.	佐治へ	2.500
29.	人夫賃	.910
	三河屋	2.590
	米屋	4.000
	駒込へ	8.000
30.	事務所拂	1.710
	ネクタイ	.520
	新聞	.420

		［計	56.500］
12.	2.	電車切符	.850
	4.	午餐	.800
	7.	下男へ	1.820
		ラシャ襦絆	1.200
	8.	歯医者へ	6.500
	10.	電車切符	.850
	12.	丁酉会	1.000
	17.	駒込へ	7.500
		布団	2.500
		洋食屋	.990
	18.	パッチ	1.100
	19.	東京教会	.250
		同クリスマス寄附	1.000
	22.	福音新報	.700
		中庸堂	.540
		カバン	.500
	23.	北文館	1.500
		電車切符	.850
	24.	点灯料	.360
	25.	新聞代	.250
		駒込へ	7.500
	27.	〃	1.000
		事務所払	1.420
		筆耕料	1.305
		下男へ	1.820
		租税	.980
		家賃	8.500
	29.	歳暮用	3.500
	30.	三河屋	3.620
	31.	米屋	4.000
		［計	64.705］

［1年間合計］

1.	148.380	
2.	82.510	
3.	24.570	
4.	130.910	
5.	36.750	
6.	46.250	
7.	38.580	
8.	42.600	
9.	65.410	
10.	50.685	
11.	56.500	
12.	64.705	
合計	787.840	［1909（明治42）］

雑録

3.24.－25.	.40	車代
	.10	細引
	4.02	汽車
	.30	朝飯
	.35	車代
	.31	足袋
	1.30	海苔
	.90	菓子
	.70	昼飯
3.26.	.18	車代
3.27.	.70	ヒゲソリ
3.28.	.08	車代
	1.60	汽車
3.29.	1.36	宝塚拂
	.71	汽車
	.35	車代
	.20	郵便
3.30.	.06	郵便
4. 1.	.13	新聞
	3.52	汽車

	.18	按摩
4. 2.	1.60	紅屋旅亭
	.90	汽車
	.30	夕食
4. 3.	2.40	静岡旅亭
	.58	車代
	.20	電報
	.20	土産
	.30	夕食

80＋12	山内	（大熊
200＋40	坂上	（今井
100＋40	宮田	（桜井

58	10	本田
	12	山内
	12	鈴木

5.	払
8.	本田×
7.8	地代
10.0	印刷
2.5	岡田
12.	山内×
2.	宮田×

15
20
5
8
48

広告最終頁脇頁
No C03345
Mar. 27 1909
65.00

孔子教会	1年	1円
津和野社	1年	
秋田 東京教会	1月	各々25銭
校友会	1年	1円
丁酉倫理会	1月	10銭
東亜協会	半年	1円
哲学会	半年	1円



［第廿二号］
紀元二千百六十九年
明治己酉四十二年
懐中日記
西暦千九百九年

編輯兼発行者　金港堂書籍株式会社
発行日　明治四十一年九月廿三日
定価　金二十銭
縦一五〇センチ　横一〇センチ、厚さ一センチ

解題

増野悦興については、後半生の日本基督教同仁教会牧師としての活動と、主催した「宗教道徳的修養の機関」成民会での活動、雑誌『成民』の研究は、これまでなされてこなかった。『増野悦興研究』ではその点を紹介・

解明したのだが、不明なことも多い。特に日本基督教同仁教会の動向については、より綿密な調査が求められている。その点で三冊の『日記』の記載事項は日本基督教同仁教会での米国人牧師と増野との関係と増野の日常生活とを振り返る上で、興味深い。

『日記』はメモで述懐や出来事への私見は見当たらないが、分量の関係で、第廿二号（一九〇九年）、第廿三号（一九一〇年）、第廿四号（一九一一年）を順次翻刻する。もし全二四冊が存在したとするなら、第一号（一八八八年）～第廿一号（一九〇八年）までが見当たらず、残念ながら廃棄された可能性が高い。一八八八年七月は増野が石井十次と親交を深める中で日向高鍋教会を設立し、松山高吉らの下で按手礼を受け、牧師に就任した年である。一九〇八年は病苦をおして、秋に秋田伝道に出向いており、孔子教会員にもなっていて、キリスト教と東洋思想との融合を真剣に模索していた時期である。

『日記』の外形写真と第廿二号の書誌は前頁の通りである。翻刻にあたり、人名については、姓のみで名前が分からず、現時点では人物を特定できない部分が多くある。以下、『日記』から読み取れるこの時期の日本基督教同仁教会の動向と増野の日常生活について解説する。

日本基督教同仁教会の動向

ユニバーサリスト派の日本での活動は、一八九〇年四月にボストンから来日したペリン（Rev. George L. Perin）が総括、スクーラ（Miss Margaret Schouler）が女学校教育、同行のケートが一般伝道を担当した。その後、スクーラに代わりケート夫人エラが女子教育に従事した。一八九五年にはアズバンが来日し、婦女子救済施設である目白のブラックマーホーム（The Blackmer Home for Girls）を運営した。渡来時に中村敬宇が「宇

宙神教」と命名したユニバーサリスト派は、その後「ユニヴァサリスト教会」と変更された。

同教会の牧師に迎えられた増野はケートと意気投合し、一九〇五年には飯田町教会の会務を担当、ケートは増野の主宰する成民会の活動を物心両面から支援した。ケートは主任者として一八年間布教に務め、秋田教会を開拓したが、病気療養の帰国途上に他界した。

本『日記』の眼目は、教会名変更の記述である。ペリンの後任ケールン［四月一二日］が、本部教会で『吾徒の信条』を起草した増野に相談し、増野は韓退之の句である「一視同仁」から採って「日本同仁基督教会」と命名した。名称変更は一九〇九年八月二八日［八月三一日］で、増野はケート夫人に報告［九月三日］、本部主事に任命され［九月六日］、ケールンの仕事を引き継いだ。『吾徒の信条』［九月九日］には、日本同仁基督教会の立場が表明されている。増野は〇五年夏から〇九年秋［十月七日～一九日］と五度、秋田伝道をしている。秋田教会には年末に水平三治が牧師として赴任［十二月十六日］した。社会運動家水平と秋田教会の活動については、今後調査を進めたい。

日本同仁基督教会には、飯田町教会本部［三月二十一日］、ブラックマーホーム［一月八日］、同仁ハウス（The Dojin House in Tokyo）があった。『日記』には、アズバン、ロブデル、ハーサウエイ、ケールンらのアメリカ人宣教師との頻繁な往き来は記されているが、教会本部の会務・布教活動の具体的内容は不明である。膨大と思われる書簡類が見当たらず、各宣教師の事績についても未解明である。一九六一年にユニバーサリスト教会はユニテリアン派と合同した。宣教師からアメリカ本部への報告書の存在も含めて、ユニテリアン・ユニヴァーサリスト協会（Unitarian Universalist Association）への問い合わせと調査も課題である。

一九一〇年一月一二日の本部教会総会では役員として、幹事：岡田正男（会計）・逸見晋（記録）、理事：小沢、

渡辺、勝田、執事：佐藤祐作（最長老）・岡田正男が選定されており、『日記』には役員名が散見される。本部主事の増野はケールンとともに目白日曜学校［一月十日］、本部教会の朝・夕の礼拝・祈祷会［八月十五日］と説教［六月二十日］、ブラックマーホームの聖書講義［九月二十九日］、秋田教会［四月十三日］・静岡教会［四月三日］・名古屋教会［四月二日］・大阪教会等を巡回した。

会衆の数は東京教会で礼拝に二〇名、祈祷会に一五名程度、地方教会も二〇名ほどだった。当時の日本の宗教界の数的動向は、増野他界前年の一九一〇年末に、全国の寺院仏堂が一一万寺弱、住職が五万三千人弱、神社が一四万社弱、神職が一万五千人弱で、キリスト教会の会堂及講義所は一千二百堂強、宣教者が本邦人一千三百人強、外国人七百人、計二千人であった。単純比率は、仏教寺院四四％、神社五五％、キリスト教会一％で、住職七六％、神職二一％、キリスト教宣教者三％である。宗教界におけるキリスト教会勢力は一％に至っておらず、さらには、キリスト教会勢力における日本同仁基督教会の宣教者は本邦人五人、外国人三人、計八人で、〇・〇四％弱であった（内務省統計局編『日本帝国第三十一統計年鑑』一九一二年、五五七～五六六頁。内務省編『日本帝国 国勢一班』一九一二年、二七二～二七四頁。詳細は『増野悦興研究』四二七頁）。

ちなみに、恵まれない境遇の少女の救済を兼ねた女子寮ブラックマーホームは、当初「少女の家」と呼ばれ、芸者に売られようとしていた貧しい少女の救済を本部に要請したアズバンに応えて浄財を提供した教会員ブラックマー（Lucean Blackmer）の名前を記念して改称された（赤司繁雄『自由基督教の運動―赤司繁太郎の生涯とその周辺―』朝日書林、一九九五年）。ブラックマーホームでは、ケート夫人エラ、アズバン、ハーサウエイ、ロブデル夫妻による献身的な女子教育が行われた。ロブデルは静岡教会にも赴任［四月三日］している。ブラックマー女塾主アズバンは、増野夫妻の長女文子が五歳で夭折した際、増野が妻咲子を励まして翻訳させた『シオ

ドル物語』の刊行を全面的に支援した。

増野悦興の日常

一九〇九年、四四歳の増野は肺患が思わしくなく、やむなく妻咲子は幼少の長男肇を連れて京都の妹テルの夫で組合教会牧師の西尾幸太郎宅に転居している。この年三月三〇日、咲子は京都市立高等女学校助教諭心得に採用された。『日記』には別居中の妻子への言及はない。四国の多度津藩家老畑平学・妻もとの長女として生まれた畑咲子と一家の数奇な変転については『増野悦興研究』第二章補論（1）・第九章補論（3）に記した。

注釈でも言及したが、この年の四月～一一月にかけて、安部磯雄・岸本能武太が増野の「財政整理」に奔走している。その事実も『日記』には記されていない。

また、これも『日記』には記されていないのだが、安部とのやりとりの中で書かれた「予が伝道の根基」において、増野は借財整理のための安部・岸本の提言を受け入れ、自分は神によって生かされてきたので「終生身を伝道に捧げる」と、改めて決意している。この年八月に増野は「予が回心の顛末」（『丁酉倫理会 倫理講演集』第八四輯、のち『高貴なる人格』所収）を発表して、自らの回心が「日本の神」から「猶太の民族神エホバ」へ、さらに「耶蘇の教へたる人類神「天の神」」へ移行したと回顧している。「予が伝道の根基」も同時期に安部への私信（告白）として書かれた。この二編は、維新期に津和野藩士の家に生まれた地方青年の、同志社英学校からアンドーバー神学校、バンガー神学校を経て形成された貴重な精神・信仰・伝道遍歴の記録である。独自の神学論である「信仰的実験」論を世に問い、プロテスタントキリスト教界から異端視される中で、万人救済を掲げるユニバーサリズムに至る過程は、日本近代のキリスト教受容と信仰告白として興味深い。その詳細は『増野悦興

研究』第九章第二節に記した。

『日記』に見られる増野の日常生活は実に律儀で、定期的にきちんと断髪［三月六日］をし、受け取った手紙にはほぼ返事を出している。また、秋田伝道などの過労からの肺患の進行による体力消耗［十一月二十一日］も見て取れる。来訪者や訪問先、書信のやり取りで頻出する名前がわかる人物は、アメリカ人宣教師のほかに、安部磯雄（早稲田大学予科教頭）、村井知至（外国語学校英語科教授）、岡田恒輔（川越中学校第一回卒業生、東京帝大哲学科生）、水平三治（秋田教会牧師）、岸本能武太（前高等師範学校教授）、松村介石（日本教会長）、堀江義子（咲子叔母）らである。ご遺族が保管している安部からの書簡の日付は日記と照合できる。増野の長年にわたる負債の整理については、多額の返済金と返済先が記されており、安部の勧告に忠実に従って毎月の返済が行われている［七月二十六日］。

なお、巻末の「金銭支出簿」とメモからは、妻子と別居して一人暮らしだった増野の生活状況が伝わってくる。孔子教会（一年一円）、津和野社［（一年五〇銭）］、秋田教会・東京教会（一月各二五銭）、［同志社］校友会（一年一円）、丁酉倫理会（一月一〇銭、［『倫理講演集』一月五〇銭］）、東亜協会（半年一円）、哲学会（半年一円）などとの関わりが晩年の精神生活の支えであった。それと毎日のように出した多数の手紙（一通三銭）の郵便料もそれなりの支出であった。

記載回数の多い人物名と回数は次のとおりである。

安部［磯雄］79　ケールン70　アズバン57　植木53　ロブデル51
駒込42　村井［知至］41　小久保41　長野36　大熊35

岡田［恒輔］34　佐藤33　水平［三治］23　岸本［能武太］22　鈴木22
松村［介石］22　平野21　ハーサウエイ19　堀江［義子］18　亀井［茲常］17
宮田16　リード15　真保15　北沢［定吉］15　松浦［政泰］14
タイムス14　松尾［音次郎］14　山内14　［増野］自助11　中島［徳蔵］11
高島［平三郎］11　江守11

今後、『日記』第廿三号（一九一〇年）、第廿四号（一九一一年）の翻刻と未解明事項の調べを進めたい。